国語

〔一〕　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。解答番号は〔一〕の 1 から 13 までとする。

驚くべき哲学的透視力によって人間精神の本質を描きつづけたアルゼンチンの作家ホルヘ・ルイス・ボルヘスのセンレツな評論集『続審問』（一九五二）の巻頭に、「城壁と書物」という寓意的な短篇がある。

それは、紀元前三世紀の戦乱期を生きた秦の始皇帝による「長城建設」と「焚書」という二つの壮大な国家事業の深い相同性を暗示した興味深いテクストである。戦乱の世をヘイテイし、統一国家の新たなる始祖たらんとした始皇帝にとって、過去の王による統治の物語を賛美する儒者たちが根拠とした古い書経や詩経などのテンセキをすべて焼き払う「焚書坑儒」の命令は必然であった。過去を賛美する知識や記憶は無へと還元されねばならなかったからである。始皇帝は焚書によって一つの「歴史」そのもののプロセスを止め、新たな時間の始まりを定めることを欲した。

一方で彼は、外敵の侵入を防ぐ壮大なプロジェクトとして万里の長城を建設した。長城はたしかに国家の防衛を担保する最高度の要塞ではあったが、同時にそれはおのれを「安全」という神話のなかに自閉的に監禁することでもあった。ボルヘスは、この二つの常軌を逸した国家的行為、すなわち焚書と城壁の建設とが、いわば表裏一体の出来事ではなかったか、と問いかける。だがそれは、外部の敵と内なる敵をそれぞれ排除・殲滅するための二つの行為という意味ではない。ボルヘスは、始皇帝が死を口にすることを家臣に禁じ、自ら一年の日数と同じ数の部屋がある象徴的な宮殿に隠棲し、不老不死の霊薬をたえず探させていたことに注目する。始皇帝が真に恐れていたのは「 A 」ではなく、むしろ自らの肉体の宿命としてある「 B 」そのものだった。ボルヘスの洞察はこうだ。始皇帝にあっては、空間における城壁と時間における火が、死を遮断するための魔術的なショウヘキとして同じものだったにちがいない、と。

肉体の死を否定するための壁、そして炎。永遠の生を求めて城壁建設と焚書を命じた始皇帝は、だが歴史の背理として、自らの死が不可避であるのと同じく、書物の末路が城壁の末路をも暗示していることをどこかで予感していた。皇帝である自分の記憶を消そうとする者がきっと現われるだろう。その者は、書物を破壊した私のように、壁をも破壊するだろう。その者は

私の影となり、私の鏡となり、そして私を反復していることに気づくことはないだろう……。ボルヘスは始皇帝の声を借りてこんなふうに書きとめている。

権力はたえず、知らぬまに上書きされてゆく。壁の破壊と建設、書物の創造と焼却は止むことなく続く。戦乱のたびに記憶の抹殺がくりかえされる。破壊者たちはふたたび不死を欲望するが、それが一人の肉体の上にかなえられることはけっしてない。おそらく、建設と破壊、生成と滅却は、一つのものの運命の両極にある因果的な現象ではなく、生と死をくりかえしてきた人類、その被造物の表裏を構成する、同じ出来事にほかならないのだ。そしてその道理を否定するのではなく、その不可避の二重性を潔く受けとめ、深く諾(うべな)うことこそ、人間が人間であるという真実を証すことになる。だからボルヘスは、始皇帝の壮大な過ちを、そのような人間的な不可避の過ちとして受けとめ、それを非難したり否定したりすることなく、そこに、ある種の「発見」と「革命」の切迫を生きたひとりの人間の、悲喜劇として生じたかけがえのない真実の姿を見ようとする。始皇帝の何気ない日々の刹那(せつな)のなかで、イセイ者ⓔの意志や欲望とはかかわりなく訪れたであろう、内省と淡い夢のような深みの瞬間に彼が直観したもの。それが、審美的であり哲学的でもある深みをそなえた真実であることに、ボルヘスはかすかな希望を託そうとした。だから「城壁と書物」は、こんな文言とともに書き終えられている。

> 音楽、幸福のさまざまな状態、神話、時間によって刻まれた顔、ある夕暮れ、ある場所。これらはすべて、私たちに何かを伝えようとしている。私たちが見逃してはいけないものを教えてくれている。あるいはたったいま何かを伝え終えたところかもしれない。いまはまだ起こっていないが、ある啓示的な瞬間が差し迫っていること。そこにこそ美的な事実は宿っているのだ。
>
> (Jorge Luis Borges, "La muralla y los libros", en *Otras inquisiciones*, 1952. 引用は: Jorge Luis Borges, *Obras Completas 1*. Barcelona: RBA. 2005. p.635. 私訳)

生における「啓示的な瞬間」とは、何気なく、不意に訪れる。壁の建設や書物の焼却というような顕示的な行為の対極にあって、ふとした音楽や、夕暮れや、顔のなかに、何かが啓示され発見される瞬間が私たちを待っている。始皇帝ですら、そのモニュメンタルな所業の影で、そうした啓示的瞬間を［　9　］していたはずなのである。ボルヘスの、そして私たちの文学も哲学も、この③人間的なぎりぎりの希望に根を持っている。

だがいま、始皇帝の物語の寓意は、おそらくより表層的に解釈されてしまうだろう。壁の建設による他者の排除と自己の不死幻想への封じ込め。現在の権威を正当化するための過去の抹消による知の歴史の全面的破壊。始皇帝の所業の見かけをこうまとめたとき、その欲望と行動とが、いまの私たちが直面する社会の支配的な趨勢（すうせい）とみごとに重なることを誰もが直観してしまうからである。

国益だけの一国行動主義や排外的な権威主義体制が、知らぬまに自己封鎖と、過去から学びつづけることを軽視する反知性主義を呼びだすというだけではない。いまや、デジタルネットワークによって破壊された人間の厚みある公共圏にかわって、自分だけの情報・データ宇宙に封じ込められたフィルターバブルのなかで疑似的自己再生産の無限ループに落ち込んだ人類がいる。現実においても、またデジタル空間においても、建設と破壊、生成と滅却がたえず生起し、その惰性的な状況を、誰ももう人間的な宿命として深く受けとめることはない。永遠や不死の不可能性という真理は、テクノクラシーと資本主義によって、無自覚に忘却されてしまったのである。この状況をもしボルヘスが知ったら、④彼の描いた始皇帝の深みある教訓が仇夢（あだゆめ）となったことを嘆くだろうか。

＊

現代アメリカの保守的かつ体制順応的な政治社会にたいしてもっとも厳格な批判者として発言しつづけてきた言語学者・哲学者ノーム・チョムスキー。二〇二三年の一二月で九十五歳になる彼は、二〇二三年三月八日の『ニューヨーク・タイムズ』

紙のオピニオン欄に（他の二人の言語学者との共同執筆として）寄稿した「チャットＧＰＴという偽りの希望」と題する論考で、ボルヘスの前記のエッセイに触れながら、人間の「啓示」的な覚醒の瞬間がいま目の前にある、というような⑤近年の生成ＡＩをめぐる過熱した議論の不毛性を厳しく批判している。

いうまでもなく、チョムスキーはボルヘスの言う「差し迫った啓示的な瞬間」こそが、生成ＡＩテクノロジーの進化の現在である、と言挙げするためにボルヘスを援用したのではまったくない。彼の真意は逆である。凡庸な総覧的要約と、もっともらしい事実の羅列と、多くの出鱈目（でたらめ）を平然と排出し、自らが回答するテクストにいっさいの倫理的な責任を取ることもない、ただの一次元的な単語の継起列の予測アルゴリズムでしかない対話型生成ＡＩが、あたかも「知のルビコン」を人類がついに渡ったなどという扇動的な言葉とともにメディアにおいて喧伝（けんでん）されている現在。技術者も、専門研究者も、政治家も、こぞってこの「新しい知性」なるものを汎用ＡＩの登場であるかのごとく騙（かた）り、その導入を原則的に社会のあらゆる場面において促進しようとする（それによるあらたなビジネス競争に遅れまいとする）狂騒にたいし、チョムスキーは根底から異を唱える。ボルヘスの言う、人間精神に美をもたらすような「啓示的な瞬間」がチャットＧＰＴによってもたらされることなど、金輪際ない、と。その厳格で決定的な主張は、言語学者としての彼がかつて提示した人間の自然言語における「生成文法」の標準理論が、現在のＡＩ技術の理論的な基礎になってきたことにたいする現状への深い倫理的な責任感とともに表明された、苦渋に満ちた警鐘であることによってさらに深い説得力を持っている。

チョムスキーによれば、現在の生成ＡＩが採用する機械学習モデルは、「言語」と「知性」にたいする本質的に誤った理解によって成り立っている。そしてそのようなプログラムが社会に蔓延（まんえん）することは、結果的に人間の科学的・言語的理性を退化させ、人間社会の倫理基準を格下げすることにつながる。別な言い方をすれば、生成ＡＩの生み出す文章が充分に高度な知性の生産物として受け入れられてしまうこと自体、私たちが日々使用する「言語」そのものがいまやいかに貧困化しているかを見事に証明しているともいえるのである。

一握りのＩＴ企業が独占的に運用するクラウド技術と監視テクノロジーを最大限に活用して吸い上げられた膨大な言語情報

データをあらんかぎり「呑み」尽くし、それをもとに語の出現パターンや頻度を平面的に解析してもっともらしい回答となるような語彙列を推定してはき出すという、これらの言語生成ＡＩの基本メカニズム（の凡庸さと悪辣さ）と違って、人間の頭脳とはきわめて少ない情報からでも有効な思考や推論を導きうる卓越した、エレガントな思惟システムである、とチョムスキーは断言する。人間の「知性」は、「データ」相互間の見かけの粗野な相関性にいっさい依存することなく、驚くべき創造性と批判性とを発揮することができるのである。

たとえば、自身言語学者として一九五〇年代から生成文法理論によって幼児の言語獲得の深遠なメカニズムを探究してきた深い知見に拠りながら、チョムスキーはここでも、人間の繊細な自然言語じたいが幼児期に最小限の言語情報に触れるだけで劇的に獲得されていくことを、人間の頭脳の普遍的特性としてあげている。この、人間の幼児が言語を獲得してゆくプロセスと、生成系ＡＩプログラムの言語操作が機械学習されてゆくメカニズムの根本的な違いについて、チョムスキーはこう書いている。

> 実際、これらのプログラムは、認知進化における人類以前の段階、または人類とは似て非なる段階で行き詰まっている。それらの最大の欠陥は、知性と呼ぶべきものが必ず持つべき決定的な能力が欠けていることである。その能力とはすなわち、何が事実であるか、何が事実だったか、何が今後事実となるかを説明し予測するだけでなく、何が事実ではないか、そして何が事実ではありえないかを語れる能力である。言語的了解とはそうした要素によって生まれるのであり、これこそが真の知性の証しとなるのである。
>
> （Noam Chomsky, Ian Roberts and Jeffrey Watumull, “Noam Chomsky : The False Promise of ChatGPT”. *The New York Times*, March 8, 2023. 私訳、以下同）

学習時における語彙情報の多寡がことばの運用の基礎を決定するのではない。言語思考においては、「知性」なるもののあ

る種の神秘的かつ飛躍的な生成の瞬間こそが決定的なのである。チョムスキーは、生成ＡＩの最大の欠陥を、それがすべてを「事実」の集積としてみなすという、既存情報への過剰依存・過剰摂取の悪癖としてとらえる。言い方を変えれば、生成ＡＩはすべてを事実という名のデータとして「問題化」してしまうのである。それは、存在するあらゆるデータをおなじアルゴリズムによって精査する網羅的摂取能力がＡＩに物理的に与えられているからにほかならない。だが人間の頭脳＝精神とは、何が問題であるかを見極めようとすると同時に、「何が問題でないか」を「直観的に」見極めることもできる精緻なシステムなのである。

（今福龍太『霧のコミューン』による）

問一　二重傍線部ⓐ～ⓔの漢字と同じ漢字を含むものを、次の各項の中からそれぞれ選び、その番号をマークせよ。

1
ⓐ
1　細胞ブンレツ
2　レッセイを跳ね返す
3　秋霜レツジツ
4　式典にサンレツする

ⓑ
1　ザンテイ政権
2　テイセン協定
3　民事ホウテイ
4　条約のテイケツ

2
ⓒ
1　画竜テンセイ
2　キョウテン動地
3　皇室テンパン
4　キュウテン直下

ⓓ
1　安全ホショウ
2　完全ネンショウ
3　論功コウショウ
4　交通のヨウショウ

3
ⓔ
1　ゼイセイ改革
2　ケンセイを振るう
3　大器バンセイ
4　シセイ方針

4

5

問二　傍線部①はどういうことか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

6

1　焚書が過去の知識や記憶を無へと還元するのと同様に、長城建設も無から新たな統一国家を始める象徴である
2　焚書は国内における敵を排除しようとし、長城建設は外部から侵入する敵を防ごうとする点で表裏を構成する
3　焚書と長城建設はいずれも始皇帝が自らの肉体的な死を否定しようとするものであり、表裏一体を成している
4　人類にとって破壊と建設は同じ出来事の別の側面であり、焚書と長城建設は共通した歴史的性格を持っている

問三　空欄　A　B　に入る言葉の組み合わせとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

7

1　A　書物　B　死
2　A　外敵　B　内なる敵
3　A　敵　B　死
4　A　死　B　老い

問四　傍線部②の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

8

1　始皇帝の死が不可避であるならば、始皇帝が築いた城壁もいずれ何者かによって破壊されることになる
2　始皇帝が過去の知識や記憶を抹消したことで、次には始皇帝自身の痕跡を抹消しようとする者が現れる
3　始皇帝によって書物が破壊されたのと同じように、世の常として城壁もまた破壊されるべき運命にある
4　始皇帝は永遠の生を求めて城壁建設と焚書を命じながら、それでも自身の死が避けられないことを知る

問五　空欄　9　に入る言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

9

1　期待　2　理解　3　予感　4　希求

問六　傍線部③は始皇帝の物語のどこに見出されるか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。　10

1　他者の排除と過去の抹消という壮大な過ちを始皇帝が自らの主体的意志や欲望に従って否定すること
2　生成と滅却の不可避の二重性という真理が内省と深みの瞬間に直観として始皇帝にもたらされること
3　不滅を求めて破壊を繰り返した始皇帝の所業を通して人間が人間であることの真実が証明されること
4　城壁の建設や書物の焼却が悲喜劇だった事実を審美的で哲学的な真実として始皇帝が受けとめること

問七　傍線部④の例として適切でないものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。　11

1　自国の利益だけを重視して過去から学ぼうともしない排外的な権威主義と反知性主義が支配的になっている
2　人間の厚みある公共圏は一元的なデジタルネットワークによって建設から破壊へとその役割が変化している
3　人類はデジタル空間で自分だけのデータ宇宙に封鎖されて疑似的自己再生産の無限ループに落ち込んでいる
4　生成と滅却は絶えず繰り返されるという真理がテクノクラシーと資本主義によって無自覚に忘却されている

問八　傍線部⑤の理由として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。　12

1　単に単語の継起列の予測アルゴリズムでしかない生成ＡＩは人間の頭脳と根本的に異なっているから
2　生成ＡＩが採用する機械学習モデルは自身の理論を基礎としながらそれを歪曲してしまっているから
3　扇動的な言葉とともに喧伝される生成ＡＩの導入は新たなビジネス競争によって促進されているから
4　人間の言語と知性に対する本質的に誤った理解が生成ＡＩの生みだす文章を通して拡散しているから

問九　本文の内容と合致しないものを、次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。　13

1　生における啓示的な瞬間は不意に訪れるものであって生成ＡＩによる既存情報の網羅的解析とは相容れない

2　ボルヘスが始皇帝の物語に描いたような直観をもたらす内省的な知性が生成ＡＩには決定的に欠如している

3　生成ＡＩの生みだす文章を高度な知性の産物と受け入れてしまうことは人間の言語活動自体の貧困化を招く

4　自らの回答に一切の倫理的責任を取ることのない生成ＡＩは人間に事実を語るための言語情報を欠いている

〔二〕　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。解答番号は〔二〕の 1 から 8 までとする。

ここに①有無庵といふ、隠逸あり。俗性いやしからず。壮年の時、土州高知に仕官の身なりしが、世をやかましいものにおもひとり、（中略）和州当麻山のふもとに、（中略）紙のふすまに茶瓶ひとつ、是より外には糂太瓶（じんだがめ）さへなくて、②膝をいるるばかりを安んじ、やすき庵（いほ）と得心し、ねふたければ昼もねる、目がさめたれば夜も寝ず。（中略）

未来は上品蓮台に座して、楽をしたいとおもふ欲もなければ、地ごくにおつるはずもなし。しぬるまでは生きて居るであらうとおもふばかりなりしが、ある時③在世の人倫、恋にしのぶの色里、一見せばやとおもふ、一念おこりければ、（中略）難波の新町に、夜見せの灯あぐるほどに行着き、心まかせに見めぐりしが、（中略）「かへるべき庵もとほし。今宵はここにあかさばや」と、端の住吉屋④が軒の下に、袖をかたしきまどろみけるが、寅の刻ばかりにやあるらん、枕もとに人おとあまたしければ、首もたげて見るに、白髪の翁、水ごろもに花色の尉斗目（のしめ）、舞扇もちていかさま中入りまへの大夫（たいふ）出立、（中略）此の外はみな人間のかたちにあらぬもの、⑤一めんになみゐて、翁が下知をうくるけしき、不思義といふもおろかなり。

されども有無庵、ものにおどろかぬ性念なれば、かの翁にむかひて、「そもこのありさまは何と申す事にや侍るらん。まづ御身は何人ぞ」とたづねしに、翁完爾（くわんじ）と打ちゑみて、⑥「御坊の不審もっともなり。それ物おほく集る所には、その気かたちをむすびて精霊あり。今ここにあらはれたるもの、この廓にてとりあつかふものの精なり。（中略）まづかく申すそれがしは、いにしへ秦の始皇の御代より、千とせをへたる松の精なり。（中略）松といふことのはのちりつもりて、かやうに形をあらはすぞや。（中略）またその色何とも見わけがたく、そのかたちぬらりひよんとして、たとへば、鯰に目口もないやうなるもの、あれこそうその精なれ」。（中略）「又はるかあなたに、丁銀拾貫目入の箱、弐百ばかり、中勘にも、弐千貫目とはたしかに見ゆるは、此の里の繁昌につき分限者の精か」と、たづねければ、翁のいはく、「いやいやそれは了簡ちがひ。あれは惣女郎たちの、 7 の精なり」とをしへぬ。

（『好色敗毒散』による。ただし本文の一部を省略した）

問一　傍線部①の人物の説明として、適切でないものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。　1

1　若い頃は高知で仕官していたが、世を煩わしく思って隠棲した
2　庵では簡素な生活を楽しみ、俗世の欲にとらわれない仙人のような暮らしをしていた
3　未来の極楽や地獄を意に介さず、ただ「死ぬまで生きているだろう」と気楽に構えていた
4　世間の色恋沙汰や遊郭のにぎわいに対しては厳しく拒絶し、近づくこともなかった

問二　傍線部②の意味内容として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。　2

1　膝を曲げて気楽にいられる庵を建て、「やすき庵」と名づけて満足し
2　膝まで沈むような深さに体をなじませ、粗末な庵でこころを落ち着かせ
3　膝が入るほどの狭さに納得し、庵の値の手頃さを重んじ
4　膝を入れるだけの手狭さに満足し、気楽な庵と自分で納得し

問三　傍線部③の意味内容として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。　3

1　俗世の人たちが思いこがれる色里を、一度見たいという思いが起こったので
2　この世に生きる中で、一度は道を踏み外して色里を見にいきたい思いが起こったので
3　世の人たちが恋心を耐え忍んでいる光景を一度見たいという思いが起こったので
4　在世の人々が恋に苦しんでいる様子を目撃したことで、にわかに怒りを覚えたので

問四　傍線部④と同じ働きをもつものとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

4

1　雀の子を犬君が逃がしつる
2　雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるはいとをかし
3　左中弁にて亡せにけるが子なりけり
4　落ち入りける時、巳の時ばかりなりけるが、日もやうやく暮れぬ

問五　傍線部⑤の意味内容として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

5

1　波のように揺れ動いて座って、翁の指図を受ける様子は、奇怪といっても足りない
2　一面に並んで座っており、翁の指図に浮かれるような様子は、不思議というより滑稽である
3　ずらりと並んでいて、翁の指図を受ける様子は、不思議という言葉では言い尽くせない
4　一面に並んで座って、翁の指図を聞いている様子は、まことに奇妙で愚かな光景である

問六　傍線部⑥の意味内容として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

6

1　あなたの疑いはもっともです。物が集まりすぎると、気が乱れて精霊も逃げてしまいます
2　あなたの疑問のことですが、それが物を集める力となり、精霊という現象が起きるのです
3　ごもっともです。思いが強く集まる場所では、精霊のような雰囲気が生まれて形が消えるのです
4　あなたの疑問はもっともです。物が多く集まるところには、その気が凝り固まって精霊を生じます

問七　空欄 7 に入る言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

7

1　借銭　　2　恨み　　3　繁昌　　4　情念

問八　本文の内容と合致しないものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。　8

1　有無庵が新町の遊里にたどり着いたのは、夜の店の明かりがともるころであった
2　有無庵は夜中に不思議な光景を目にしても、取り乱すことなく落ち着いていた
3　大夫姿の白髪の翁は、有無庵にまず千年を経た老松の精を紹介した
4　一見すると人間のかたちには見えないものが有無庵の目の前に現れた

〔三〕　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。解答番号は〔三〕の 1 から 8 までとする。

山之口貘の詩のなかで、あまり人の注目をひかない、そして言及されたものも見たおぼえがない、けれど逸することのできない一篇がある。

応召

こんな夜更けに
誰が来て
のっくするのかと思ったが
これはいかにも
この世の姿
①すっかりかあきい色になりすまして
すぐに立たねばならぬという
すぐに立たねばならぬという
この世の姿の
かあきい色である
おもえばそれはあたふたと
いつもの衣(ころも)を脱ぎ棄てたか
②あの世みたいににおっていた
お寺の人とは

見えないよ

終りの三行が、秀逸である。

かあきい色とは当時の軍服の色で、召集令状がきて、あわてて挨拶に立ちよった知人の僧の姿である。きのうまでの僧衣や袈裟をかなぐりすてて、たちまちに兵隊に化けてしまった③滑稽さ。

ふだんは、むやみな殺生を禁じ、慈悲の心を説き、煩悩の浅ましさを教え、あの世への解脱を語り、しめやかにお経をあげていた人が、一転、軍服を着て、

「只今より、人殺しに行ってまいります！」

と敬礼するようなものだから、矛盾のきわみである。

もっともその頃は、召集されたら、国の楯となって死ぬのだ、死ぬのだ、という意識のほうが強かったが、征けば実態は人殺しだった。僧職に限らず、兵士になってはなんとしてもおかしいよ、という職種はまだある。

今おもえばあたりまえのことだが、一九四〇年代は④そこに矛盾も疑問も持つ人はなかった。

私も日の丸の小旗を打ちふって、僧職にあった人の出征を見送ったおぼえがある。そんなに若い人ではなかった。国民皆兵で否も応もなかったとはいえ、日頃の行いからはあまりにもうらはらな変りよう。戦友の弔いには便利であったというけれど、それにしても……。

一人猿さんは、⑤その虚を衝いたのだ。やわらかいはなし言葉で、ポツンとひとりごとのように。けれど内包しているものは鋭くて、このブラックユーモアはこたえる。

易しくわかりやすい日本語で、これだけのことが言える。観念語も詩的修飾語も使わなかったことが、詩としてのとびきりの新しさだったのだ。更に上等なのは、肩の力がふわりと抜けていることである。

推敲の鬼とも言われた人で、一篇の詩を完成させるのに、二百枚も原稿用紙を消費したと伝えられ、「ちょっとぱあではな

いか」と当時から、からかわれたりしているが、今読んでみると、やはりそれだけのことはある。実にやわらかいが、助詞ひとつ動かせない硬質さでぴたりと定まっている。推敲はむずかしく、へたにいじりまわすと最初の生気が失われてしまう。⑥そのへんの呼吸はよく心得ていた人のようだ。

山之口貘は沖縄県出身で、若い頃就職しようにも「チョーセン・オキナワお断り」の貼紙に何度も苦汁を飲まされ、定職につけず、ルンペン詩人と呼ばれた時代もあった。貧乏においても右に出る者なしだったが、生涯、精神の高貴さを失わなかったことでも知られている。

日本の社会から疎外された境遇が、このように曇らない眼、歪みを見据える眼を持ちえた原因なのだろうか。狂気、異常、狐憑(きつねつき)——今ならばなんとでも言える一九四〇年代、たいていの人が、こころの方は、三十八度から四十度くらいの高熱を発し沸騰していた。からだのほうも栄養不足の結核で微熱を発している人が多かった。

そういうなかで身心ともに、平熱三十六度を保ちえた山之口貘の冷静さ。ふしぎである。

どうして？　と何度も問うてみるが、幾つかの理由は考えられるものの、はっきりした答を引き出すことができない。

かつて高熱を発していた詩は、一見有効そうに見えていたのだが、⑦アッというまに引潮にさらわれて行方も知れず消えてしまい、貘さんの詩は残った。

昂揚感というのもいいものだが、それも恋愛とか、学問上の発見とか、仕事のよろこび、スポーツの達成感など、内発的なものに限られる。他から強制されたり操られたり時代の波に浮かれたりの昂揚感は化けの皮が剝がれた時、なんともいえず惨めである。その惨めなものを沢山見てきてしまったような気がする。自分自身のこととしても。

からだもこころも平熱であるにしくはない。そして、⑧平熱はたえず試されるものであるらしい。うっかり風邪をひいてさえ、そのことを思う。

（茨木のり子「平熱の詩」による）

問一　傍線部①は筆者によればどういうことか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

1

1　いかにも軍人らしい装いがかえって日頃の行いとの落差を思わせるということ
2　召集に応じて軍服に着替え夜更けに挨拶しに来た姿に悲哀を覚えるということ
3　僧侶のくせにすぐ応召して軍装になってしまう態度がうさんくさいということ
4　召集に何らの疑問も持たず軍服に袖を通す軽薄さにあきれてしまうということ

問二　傍線部②は筆者によればどういうことか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

2

1　あの世への解脱をそこはかとなく予感させたということ
2　いつもの衣の方が死装束にはふさわしかったということ
3　僧衣に染み付いた線香の香りが独特だったということ
4　僧侶としてのたたずまいを醸し出していたということ

問三　傍線部③は何が「滑稽」なのか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

3

1　僧衣や袈裟を脱ぎ軍服を身に着けただけでたちまちに兵隊らしく見えてしまうこと
2　殺生を禁じた者が殺生を遂行する者へ瞬時に転身していてつじつまが合わないこと
3　召集令状が来たからとはいえ、まだ夜なのに慌てて出立の準備を整えてしまったこと
4　しめやかにお経をあげる静かな物腰と元気よく敬礼する溌剌（はつらつ）とした姿が矛盾すること

問四　傍線部④が指し示すこととして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。　4

1　召集されたら国の楯となって死ぬのだという意識が広く共有されていること
2　実は戦地で単に命を落とすだけなのに国の楯として死ぬと思い込んでいること
3　戦地での任務の実態と齟齬（そご）を来すような職種についていた人が兵士になること
4　世には兵士になるのがおかしい職種があるという当然のことに思い至れること

問五　傍線部⑤の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。　5

1　大勢が陥った思考停止状態からいち早く脱した
2　戦時中の思想に漂う空虚さを鋭くも指摘した
3　戦争と宗教に関する問題を先駆けて見抜いた
4　戦時に見過ごされる常識のねじれを露わにした

問六　傍線部⑥の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。　6

1　度重なる推敲をからかわれても完成を目指し朱を入れる詩人としての忍耐強さ
2　観念語も詩的修飾語も使わずなお詩全体としては硬質さを保つ言葉のバランス
3　その詩が生まれた時から持つ言葉の勢いを削ぐことなく手を加える推敲の加減
4　詩の世界が生気を失わないよう慎重に言葉をつむぎ出すための作品との間合い

問七　傍線部⑦の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。　7

1　戦中の日本で支配的だった思想を一掃せんとする占領軍に一気に追いやられて
2　戦時体制下の世間に横溢（おういつ）していた昂揚感が敗戦を機に一挙に冷めるのに伴って
3　戦争が終結したことにより瞬く間に台頭してきた新たな思潮にはそぐわなくて
4　戦争中は幅を利かせていた権力者達がたちどころに失脚したのと軌を一にして

問八　傍線部⑧はどういうことか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。　8

1　時代の波に乗せられて社会の欺瞞（ぎまん）に気付けなくなる恐れは常にあるということ
2　人が正気を失い心に狂気を宿すような出来事はたえず起こっているということ
3　身体の健康と精神の均衡とを維持し続けるには不断の努力が必要だということ
4　いかなる時でも心の昂揚を抑え冷静さを保つことは常人には難しいということ

（以下余白）